

# 時勢の推移

満洲國新京 直木倫太郎

東京築港計畫に對する私の思ひ出は深い、私は前後三回それと直接關係の立場に置かれたからである。

明治32年の夏古市中山兩博士が、東京市の委嘱によつて東京築港の計畫に着手された折柄丁度東京帝大を卒へた私は望まれて東京市に就職の上、兩博士の指導の下に専念該計畫の調査測量に從事することとなつた。

所謂『古市中山兩博士計畫案』は越えて34年の春に發表せられ、その總工費4,100萬圓、第一期工事費3,400萬圓は當時の經濟界を驚かすに足る素晴らしいものであつたが、早速東京築港調査委員會が作られ、時の市會議長星亨氏が調査委員長として眞剣に乗出し、第一期工事着手の議を決して議會へ國庫補助請願の手續に及ぶやら、連日貴衆兩院議員を招待して星氏自身が計畫圖に鞭をあてゝ、技術家跳足の計畫説明をやつて退くるなどの元氣さ華々しさは今も尙まざまと眼底に浮かぶを禁ぜぬ。

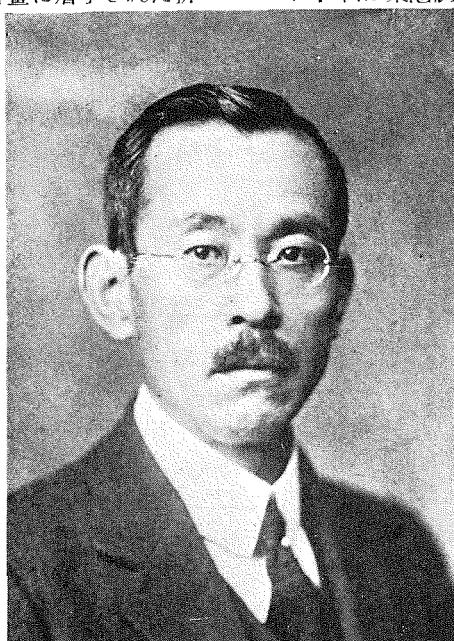
果然賛否の議論は轟々として全市を沸立たせた。築港と共に東京の中心が芝浦に移るとの懸念、品川に外國船を引入るゝは帝都を惡疫流行の巷に化せしむるとの反対、横濱側の異存などが賑やかに沸騰した。然かも星氏は

敢然としてこれに應酬すると同時に、私に命じて直ちに海外を巡視し専ら築港工事の實地を研究して來よとのことに、即時出發を急ぐ折柄、不幸にも星氏は刺客の手に僵されて了つた、私は築港調査委員長の机邊の後片附けを爲す時、既に氏が佛國財團との間に内々折衝せられつゝあつた一束の書簡を見出でゝ、氏が如何にこの築港問題に最後の熱意を傾倒しつゝあつたかを知つた。

私の留守中市長は松田秀雄氏から尾崎行雄氏に、築港調査委員長は金子堅太郎氏から大石正己氏にと代られたが、私は窓に星氏と共に築港の命脈も失はれたるかの感に打たれし爲、折角の外遊を一年位で切上ぐるよりはと市に請ふて更に二年

間の自費留學の許しを受けたが、果然歸朝後の東京市には最早築港の熱は冷め切つて居たので、その間塞きとして私は隅田川口改良計畫を樹て、築港計畫と牴觸せざる範圍の芝浦地先の埋立てを先にし、自給自足的に歩一歩築港經費の捻出を策するより外はなかつた。

第二回は明治44年の夏、時の東京市助役田川大吉郎氏から築港事業遂行の成算を得たから再び市に入つて事に當れとの熱心なる勧めに遇ひ、往年海外派遣の殊命に對する義理もあり無下に辭退すべからざるハメとなつた。



然も私は單に東京市の自力のみでは所詮は過去の失敗を繰返へずの外はないから、是非官民合同の力を以て事を興さねばならぬ、市には新に芝浦に生れた埋立地があるから先づそれを金に換えて民間の資金と合體せしむべきであるとの主張を説いた所、田川氏も全然同意見のことから、遂に時の横濱築港工事から手を退いて二度目の東京市入りとなり、築港計畫上多少の修正を加へて、品川灣内の港域取擴めと第一期工事費の節減を策し、且つ大森地先に假港門を設けて内港の利用促進を旨としたが、遺憾ながら此時も機運の未だ熟せざるあり、田川助役を中心とした非常な努力も、坂谷芳郎市長の配慮も遂に何の酬るる所なく、辛うじて隅田川口改良第二期工事の着工にお茶を濁して私も再び退却の餘儀なきに了つた。

第三の機會は彼の大正12年月の大震災と共に來つた、當時専念大阪築港工事に没頭しつゝあつた私が急遽帝都復興院技監の任を拜するや、三度手づから東京築港計畫の樹立と遂行とに邁進せざるを得ざらしめた、仍て月島を中心とした内港の擴大を眼目として新たなる築港計畫を立案の上復興豫算に組込み復興參議會の可決を見たが、然かも最後に復興審議會に於て否認されるゝに了つた、たゞこの會議の席上瀧澤榮一氏が縷々熱心に東京築港の必要を主張せられたことをせめてもの私自身の喜びとする。

爾來私と東京築港との縁は切れたが、然かも彼の震災當時の物資輸送の不便と混雜とが強く東京市民を刺戟して、痛切に築港の必要を感じせしめたことこそ大きな幸ひであつた。最早誰もが都市中心の移轉説や悪疫傳播の不安説に惑はさるゝ氣遣ひはない、其處に大きな時勢の推移がある、私自身はたゞ東京築港の幻影をのみ追ふて走つた一人たるに過ぎなかつたものゝ、今や其後の時運に乗つた人達の輝やかしい努力によつて東京港修築工事は着々功を修め、こゝに其前半の事業たる

直木博士の  
藝吟より

之は俳句をよくせられる博士が復興局長官時代に我社編輯部に與へられしものである。



隅田川口改良工事が竣工の誇りを祝するまでに漕付け得られたことこそ何たる愉快であらう。

今や満洲の天地に落寞たる曠野と河川とをのみ見つめつゝある私に取つても、懐かしい東京港の修築完成は大きな過去の思ひ出である、『工事畫報』の手にその完成の全貌を如實に見渡す喜びを前にして、今更追憶の至情その止まるところを知らない。